

「地域学校協働活動推進員等研修」

平成30年5月25日(金) つがる地区会場(青森県総合社会教育センター 第1研修室)
受講者数 86名

平成30年6月 1日(金) 南部地区会場(七戸中央公民館 大ホール)
受講者数 69名

平成30年度「地域学校協働活動推進員等研修」のつがる地区会場は5月25日(金)に当センターで、南部会場は6月1日(金)に七戸中央公民館で開催しました。

本研修は、学校支援活動、放課後子ども教室、土曜学習及び家庭教育支援等の幅広い地域住民の参画により、地域と学校が連携・協働して子どもたちの成長を支える活動(=地域学校協働活動)において、連絡調整役を担う地域学校協働活動推進員等の資質向上を図るとともに、他の事業関係者との情報交換・情報共有を図ることを主なねらいとしています。今回は両会場とも国立大学法人宇都宮大学教授・生涯学習研究開発室長の佐々木 英和 氏を講師にお迎えし、「地域と学校が協働して子どもを育むために～コーディネーターの役割について～」と題し、講義と演習をしていただきました。

【概要】

1. 「教育とコミュニケーション」について考えるために

- (1) エデュケーションとしてファシリテーションを意識する。
- (2) 地域と学校が協働してやる活動が「まちづくり」
「未来の青森県づくり」につながることを意識する。
- (3) 「自分たちらしさ」を大事にする。



2. ファシリテーションを成功させるための基本戦略

- (1) 「サンマ」を企画・設計・創造せよ

「サンマ」= 3つの間 時間・空間・仲間

- ・時間・・・塾に通うことにより、子どもたちの放課後の時間が無くなった。
- ・空間・・・マンションなどの建設により、子どもたちが自由に遊ぶことの出来る空間が無くなった。
- ・仲間・・・テレビゲームが出てきたことで、仲間と遊ぶことが無くなった。人間関係が豊かで無くなった。

※この3つの「間」を企画・設計・創造していくことが「まちづくり」である。

つがる地区会場の様子



3. 家庭・学校・地域との連携

これまで「教育」というものは「学校が行うもの」というイメージが強かったが、これからは「学校のコミュニティーによる人間関係形成を支援するもの」と考えていくべきである。「地域の人々全体で人間関係を支援していく」ことである。

家庭・学校・地域の連携でお互いの信頼関係を豊かにすることで結果的に学力が向上する。

4. 伝えることと、伝わることの違い

・「伝達」の4つの場面

○⇒○ 伝えたから、伝わった

○⇒× 伝えたのに、伝わらなかった

×⇒○ 伝えなかったのに伝わった

×⇒× 伝えなかったから伝わらなかった

SNSの普及により、相手の顔を見ずしてコミュニケーションを取ることが増え、送り手と受け取る側のズレから本筋が相手に伝わらないことが増えてきている。「教えること、学ぶこと」にも同じことが言える。

「教えたから学んだ」ではなく、「自ら学ぶことを身に付けさせる」こと（教わらなくても学べる力）が大事である。

5. 演習

演習は「戦術具体化トレーニングシート」を使い、現在、地域コーディネーターや放課後子ども教室を運営している中で抱えている問題を出し合いました。そして、自分たちが描いている理想の姿を具体化し、理想の姿に近づけるためにはどのような方法があるのかをみんなで見出し合いながらグループワークを行いました。それぞれの地域性や地区によつての違いもありましたが、受講者のみなさんは積極的に意見の交換を行い、今後の運営に生かす内容を共有することができました。

【南部地区会場の様子】



○受講者の感想

- ・初対面の方とのコミュニケーションのとり方や心構えなどを学びました。また、地域と学校の関わり方の難しさを改めて認識しました。
- ・理想と現実、テーマ設定。まさに感じることの多い、チームの方の心の声に語りかけることのできた素晴らしい内容でした。
- ・コミュニケーションのとり方は推進員としてはとても必要なことだと思います。「現実と理想を考えること」、「取組を進める上での考え方が分かる。」ためになる研修でした。
- ・教育の在り方を今一度考えてみる機会となり、とても有意義な時間でした。子どもたちに対しても「尊重すること」、それを「体験させること」、「コミュニケーションの主導権を握らせること」が大事であることを学びました。